第Ⅰ部　南スマトラの民族と自然

スマトラにおける人間の居住史において山地ないし高地が重要な役割を果たしてきたことは間違いない。北部および中部の主要民族であるバタックやミナンカバウの生活の中核地帯は高地であったし，南スマトラ州やランポン州を含む南部においてもアブン系諸族の揺籃の地は脊梁山脈中のスカラブラックとされる。実際，数多くのヒンズー遺跡は脊梁山脈中に残存している。諸民族の発展に応じて集落形成は本流および支流を含む川岸沿いに行われたが，川から離れた台地および下流部の低湿地は居住密度がきわめて低かったといえる。これらの土地にもやはりかなり古くから居住し続けるグループは存在したが，相対的な居住密度の低さと未利用地の多さの故に，これらの地域は最も新しい時代に本格的な開発の対象になっていくのである。

低湿地開発のための技術体系は一部の人々に伝統的に用いられたものが伝播した場合と，機械力を大幅に使用した現代技術によるものとがある。前者はコミュニティあるいは小集団レベルの自主的な開発であり，後者は主として政府レベルの外島移民計画に関連している。低地の開発はイラワジ，チャオプラヤ，メコンなどの大陸部デルタでは19世紀に始まる現象であったから，スマトラではずいぶん遅れて実現されつつあるといえる。これはボルネオ島にも共通する現象であって，大陸部と異なり上・中流部に人口の蓄積を十分にもたなかったことと，下流部が泥というよりはピートによっておおわれているという島嶼部の性格に規定されているのかもしれない。

低地はいわゆるコミュニティレベルの水利事業ではほとんど歯がたたない性格をもっている。大陸部デルタの低地開発が政府あるいは企業家による土木工事と急激な人口流入とをともなったことはよく知られているが，タイ国のチャオプラヤデルタやマレーシア西海岸の農村コミュニティがきわめて枠の弱いものとなったのはおそらくこの事情と関係している。コミュニティ結合の弱さはともすればコミュニティレベルにおける水利事業の不必要性から説明され易いのであるが，これは水利とコミュニティ結合とを短絡させているといわねばならない。南スマトラ州における伝統的な低地居住の事例は，共同水利を欠く稲作コミュニティの弱体性が一般的ではないことを示す。ここでは集落の形成は主として分村形成を契機として行われたのであるが，このようなコミュニティの重視は，国家ないし植民地の統治ないし治安が十分に作用せぬ状況を前提として，住民の自衛のために不可欠だったのである。この原理は焼畑社会の発展に連なるものであるが，実際に南スマトラの低湿地において伝統的に適用された耕作方法自体も焼畑の延長上に位置づけられる。南スマトラの伝統的な開発は，単純化すれば，焼畑原理の拡大と表現することが可能であろう。いわゆる外島移民計画は上述の自主的開発の原理に真っ向から対立するものであって，今世紀初頭に東南アジア大陸部デルタで生じた現象に対応する側面を有している。

第Ⅰ部ではこのような南スマトラ開発史を念頭におきつつ，その背景を構成する報告を集録した。